

鮮烈な赤い糸と18万個もの鍵 ：ヴェネチア・ビエンナーレ2015日本代表作品



鑑賞者と共に「読み解く」のではなく「体感する場」

蜘蛛の糸のように張り巡らされた赤い糸から吊るされた鍵が、大量に降り注ぐ圧倒的な迫力あるインスタレーション。2015年当時、ヴェネチア・ビエンナーレ開幕を伝える現地新聞の一面トップは、日本館の塩田千春の作品写真が飾った。

作品「掌の鍵」は、鍵が身体のように一人ひとりを表現しており、18万個の「鍵」は、主にアジア、ヨーロッパ、アメリカから送ってもらった。鍵はそれぞれ「大切なもの」「人の記憶」を象徴づける素材。鍵と糸は人と人をつないでいる。鍵を人に預けるということには、「個人的・社会的な責任」が発生し、また同時に大人が子どもの掌に鍵を渡すのは、未来を託すことを意味する。真っ赤な大量の糸と鍵の不思議な異次元の空間は、「体感する場」として、来館した多くの人々に感動と共感をもたらした。

島の宝物《遠い記憶》 ：豊島@瀬戸内国際芸術祭(2010)

豊かな島=豊島。そこでの作品づくりのテーマは二つ




一つは、産業廃棄物の問題を抱えている豊島で、新しい素材で何かを作るのではなく、島にあるもので作品を作ることを考えた。7つの島から集めた廃屋の窓を使ったトンネルづくり、その向こう

には豊かな田園が広がる。もう一つの問題は、高齢者が多く過疎化の進行に対し、集落の人の心に通じる作品づくりをめざした。

島民とのコミュニケーションをとりながら、どのようにして作品を作ればよいかをキュレーターに相談したところ、まず、あいさつをください。島の人はとても親切ですが、何かをもらった時、お金ではない形でお返ししてください。とアドバイスをいただいた。今や島の人は、作品を「島の宝物」と言ってくれている。制作の過程での、人と人とのコミュニケーションの大切さを実感、島民の窓運びの手伝いでできた作品。自分も島の人も、心が豊かになっていくのが、嬉しかった。

(コラム)高校の美術の教科書を開くと、塩田千春の赤い毛糸と靴のつながった作品が、ピカソの自転車のサドルとハンドル作品、デュシャンの自転車の車輪、M・レイのアイロン、R・ラウシェンバーグの瓶や箱といった現代アートの第一人者と並ぶ。「身近な材料で表す」。

平成31年度高等学校美術II教科書『高校生の美術2』(日本文教出版)



「美術は、絵をただ上手に描くことだけでなく、どうやって自分の気持ちを伝えるか、コミュニケーションのツールにシフトしている。今後、そういった作品が教科書に掲載されていくであろう」(出版社の人の印象深い発言)
「作品が日本の高校美術の教科書の表紙に選ばれうれしかった」(塩田談)

塩田千春

2018.08.05 Art Live Talk Report

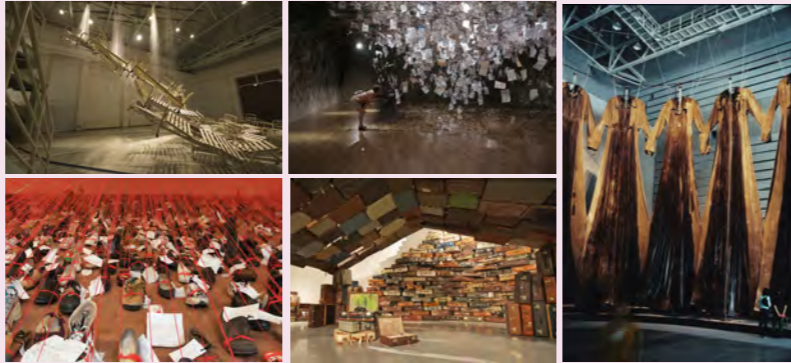
「美術」が心の支えになればいい。

塩田千春さんは、2015年のヴェネチア・ビエンナーレの日本代表に選ばれ、日本、ヨーロッパだけでなく現代美術の世界において非常に高い評価を得られています。アッポコでは、塩田さんをお招きし、アートフォーラムで、現代アートとは何か、作品と制作への思いなどのライブ・トークをもとに、このレポートを作成しました。

美術とは何か：身近な素材で人の体験や記憶を紐解く

「絵」とは人間が持つ初めてのコミュニケーションのツール。今やインターネットから多くの情報が得られるようになり便利になった。しかしなぜ人間が意識(心)を持つかは、多くの研究が行われているが未だに分からない。ある時から心の進歩は止まっており、どれだけ身近な人でも、他人の心の中にはアクセスできないし、人は何を考えているかわからない。だから人は自分の気持ちを伝えようとして悩み、どうにか相手の気持ちを理解しようと努力する。誰もがどうにもならない心の葛藤を抱えている。その感情をかたちにするのが「美術」の力。子どもが文字を書く前に絵を描くように、言葉の前に「絵」がある。絵はコミュニケーションの1つのツールである。

作品のテーマには、生=存在、死=不在など人間の根源的な問いに向き合うことが多い。眠りは死に似ており、夢・眠りをテーマに作品を作るが、夢は日常生活の小さな体験を潜在意識のすみ押しやられた記憶が蘇ったもの。生活の中で感じ取れない出来事を現実の世界に引き出して見せるのがアーティストの仕事と思う。自らの経験した記憶や感情から「物語は始まる」ので、「記憶」を媒介に他者へとつながる空間の創出をめざしている。



記憶の宿る素材、人をつなぐ糸：インスタレーション作品

①人の痕跡や記憶が内包する素材：服、鍵、靴、ベッド、旅行鞆など個人にとって身の回りの必須のもの、人の化身、スイッチ、記号のようなもの。

作品とは「スイッチ」で、観客個人が記憶を想起する。このような命のないものに命を吹き込み、人の存在を感じられるものになる。

②人と人との結びつき：展示空間に赤や黒などの無数の糸を張り巡らす大規模インスタレーション。(窓もこの変形バージョンかも)

赤と黒のインスタレーションの色の意味は、「赤」は人と人をつなぐ運命の赤い糸、または血液。「黒」は宇宙、深い夜の空。宇宙とは、自分の内にも宇宙があり、その外にも宇宙がある。内と外の宇宙が つながっていることを表現できればいいと思う。

巨大な泥のドレスで一躍脚光を浴びた「皮膚からの記憶」(横浜トリエンナーレ2001)。ドレスは第2の皮膚、皮膚からの記憶は洗い流せない。靴を赤い毛糸で結んだインスタレーション《大陸を越えて》は、大阪・中之島にある国立国際美術館(『精神の呼吸』展2008)で作成する時、靴に込められた思いを綴った手紙と共に靴を募集し、2000足が集まった。思い出のつまった靴、遺品の靴なども多く、靴を履いていた人はいなくともその存在をより表す作品となる。また沢山のメッセージの最後は、「いままでありがとう」と綴る人が多かった。



インスタレーション：Installation
据え付け、取付け、設置の意味から転じて、展示空間を含めて作品とみなす手法を指す。彫刻の延長として捉えられたり、音や光といった物体に依拠しない素材を活かした作品や、観客を内部に取り込むタイプの作品などに適用される。(現代美術用語辞典Ver.2.0)



インスタレーションとは ：瞬間の哲学だ

作品作りのスタッフ・空間・哲学

インスタレーション作品は沢山の人の手を借りる。チームで作る。現在制作スタッフは10人、展示コーディネーターは2人で、展示は日本、オーストラリア、ヨーロッパが多い。現地制作になるため作品づくりに現地で6~8人の人を集めて設置する。言葉も文化も習慣も違うので、言語の壁を乗り越えて一緒に制作することが難しい時もある。

インスタレーションは空間が大切で、どちらかと言うと大きい空間のほうが制作しやすい。小さい場合は、その場の感情を直接伝えにくいので難しい。作品はスペースを見ながら考える。空間を見た時、自分の心の中にある作品を引っ張り出してイメージする。やはり部屋を見ないとたいいてい失敗している。インスタレーションの新作は、場所を変え、形を変え、何度も完成するまでつくり発表し続ける。

「インスタレーションとは、瞬間の哲学だ」と思う。絵画、彫刻のようにじわじわと見る人に語りかける作品ではなくて、部屋に入った瞬間に作品に取り込まれ、生きることとは何か、死ぬということはどういうことかを、直接人の心に訴えかける。そのような作品が作りたい。



塩田千春プロフィール

「平成19年度 芸術選奨 文部科学大臣新人賞」、「平成19年度 咲くやこの花賞」美術部門(大阪)を受賞、2007年神奈川県民ホールギャラリーの個展「沈黙から」、2008年国立国際美術館「精神の呼吸」、2013年高知県立美術館「ありがとうの手紙」なども個展を開催、2015年第56回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展の日本館代表、2001年横浜トリエンナーレ、2010年瀬戸内国際芸術祭など

なぜ、アーティストなのか ：これまでの人生の変曲点

両親が大阪・岸和田でトコ箱を作る魚箱製造会社を経営していた。工場機械と一緒に機械のように働く人間の姿が嫌で、自分ももっと人間らしい、精神世界で生きていきたいと思うようになった。自分の位置や存在を確認したくて、美術に進みたいと思ったのがきっかけ。私は「12歳の時からアーティスト(画家)になりたい、アーティスト以外の何者にもなりたくないと思った」。

アーティスト人生の変曲点は、オーストラリア留学で、その後のグローバルな海外活動のきっかけとなった。1996年渡独、パフォーマンスの大家マリナ・アブラモヴィッチのもとで学ぶ。授業の一環で、一週間近く断食した後の早朝、彼女が枕元に鉛筆と紙を持って何か一言書くように言う。そこに書いた一言が「JAPAN」。心身ともに極限状態になることで、自身が抱えていた問題とテーマをようやく見つけ取った。その後制作したパフォーマンス作品《トライアンドゴーホーム》1997などで、土を介して自分が帰るべき場所を探りつつ、独自の皮膚感覚を醸成することが、その後の制作につながった。

なぜ、ドイツ、海外をめざすのか。最初ドイツに留学することになったのは、ドイツに受け入れ先があったことと学費がタダだったから。さらに当時のドイツは現代美術が盛んで壁崩壊後のベルリンは、世界中からアーティストがたくさん集まっていた。ヨーロッパは制作環境、生活環境がよく、アーティストが職業として成立していることなども滞りを感じた。またコレクターの相異も大きく、海外では個人が購入し、美術館等にコレクションとして寄付して展示することも多い。

アーティストとは：塩田千春語録etc.

・アーティストという仕事は、人の心を動かす仕事

それは世界共通だと思う。瀬戸内のプロジェクトで、島の人やボランティアさんと作品を作っていくうちに、みんながアートに関心を持っていくようになることが嬉しかった。

・私は「アーティストは嫌い」。なぜならアーティストの気持ちが手にとつてわかるから。アーティストがどれだけエゴイストで、人に迷惑をかけても平気で作品を最優先するかを知っているから。今は作品を作るだけで精一杯で、アーティストと一緒に群れることがほとんどない。アイデアがどんどん浮かんでくるので、この仕事をしていて楽しいし辞められない。

・絵は、言葉ではなくモノでもなく、自分の感情を人に伝えるもの。作品を作ることで、自分の欠落部分を何らかの形で埋めることができるような気持ちになる。作品を見た人が何らかの共感を感じ、美術が人の心の支えになればいいと思う。

・特別なことをしようと思うと自分がしんどくなるので、できるだけ力を抜いて等身大で、今、自分ができていることを精一杯頑張ろうと思っている。



Appoko Art Forum2018:アッポコの夏のメインイベントが終了した。アーティストの生の話しは、人となりに触れ、生き方が良くわかる。塩田さんの誠実で、控えめで、柔らかい語り、芯の通った話しなど参加者の声は、良かった、楽しかった、興味深いと好評だった。2時間におよぶ「塩田千春アートライブトーク」は、90名を超え盛況だった。



Appoko Art Forum2018交流会：8/5・大阪かしわらアゼリア(柏原市民交流プラザ)